様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２３４０

研究課題名（和文）両大戦と群集をめぐる言説－ドイツ語圏の文学と思想を例に

研究課題名（英文）Discourse of the Masses and the Two World Wars: Literature and Thought in the German-Speaking World

研究代表者
古矢　晋一（Furuya, Shinichi）

立教大学・文学部・准教授

研究者番号：２０７８２１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「群集・大衆（Masse）」の主体化の（不）可能性という思想史上の問いを踏まえつつ、「群集・大衆」の言説という観点から20世紀前半のドイツ語圏の文学と思想の特徴を明らかにすることを目的とした。ハンナ・アーレントは「全体主義運動は大衆運動である」（『全体主義の起源』）と規定したが、本研究は二つの世界大戦の中心であり、ナチズムという独裁体制を経験した20世紀前半のドイツ語圏の文学と思想を対象にしながら、「群集・大衆」の主体化の多用な試みとその特徴を明確にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年、「集団」をめぐる言説と表象の研究が、ドイツ語圏の文学研究や文化研究においても活発に行われているが、本研究課題が設定するような、20世紀前半の両世界大戦・ホロコーストと群集をめぐる言説というテーマは、その重要性に比してまとまった研究がない状況であった。本研究はとりわけ第一次世界大戦前のドイツ青年運動の理論的テクストや、ホロコーストの生還者の手記など、従来「群集」の言説という観点からはあまり論じられなかった対象を取り上げ、戦争と大量虐殺という文脈において新たな読解を試みた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to access the characteristics of literature and thought in the German-speaking world in the first half of the 20th century in terms of the discourse and representation of the “crowd/mass” (die Masse), taking into account the questions from the realm of the history of ideas, particularly those of the possibility or lack of possibility of subjectification of the masses.
This study confirmed the phenomenon in literature and thought of the German-speaking world in the first half of the 20th century, which was the time of two world wars and the rule of Nazism.

研究分野：近現代ドイツ文学・思想

キーワード：群集・大衆　群集論　ドイツ文学　ホロコースト　カネッティ　第一次世界大戦　第二次世界大戦　ナチズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究代表者はこれまでエリアス・カネッティの『群集と権力』を中心に研究を進めてきたが、この過程で群集論と呼ばれる領域や群集をめぐる言説が、二度の世界大戦とナチズムを体験した 20 世紀ドイツ語圏の文学と思想を解明するうえでも極めて重要な研究テーマであることが明らかとなった。現代ドイツの哲学者ペーター・スローターダイクは『群集の侮蔑』（邦訳『大衆の侮蔑』）の中でカネッティの『群集と権力』にも言及しながら、「群集を主体として展開する」ことこそ近代のプロジェクトであったと述べている。スローターダイクによれば、単なる「素材」としてのみ扱われてきた群集を、「独自の主体性あるいは統治性」を持った「主体」に格上げすることこそ、近代という時代のプロセスであり、（未完の）プロジェクトであった。

本研究課題の核心をなす学術的「問い」とは、「群集を主体として展開する」という近代のプロジェクトの具体的、個別的な内実はいかなるものであったのか、ということである。スローターダイクの上掲書はあくまでも思想史的な概略の記述にとどまっているため、その主張についてはより詳細な事例検討が必要である。群集は既に 18 世紀末より文学の重要な主題であり、19 世紀には都市群集を描いた文学、さらにはフランス革命やパリ・コミューンのような歴史的事件を背景にした群集心理学的研究が本格化する。とりわけ二つの世界大戦を経験し、ナチズムという独裁体制・ホロコーストにいたる 20 世紀前半のドイツ語圏においては、群集・大衆と権力の関係は、直接的にも間接的にも文学と思想の根本を規定するテーマであり続けた。本研究は、「群集を主体として展開する」という近代のプロジェクトの経緯と多様な在り方を 20 世紀前半のドイツ語圏の文学と思想に即して検討した。

２．研究の目的

本研究は、「群集は自立（自律）的、主体的な存在になりえるか」、言い換えると「群集は指導者なしに自立（自律）的、主体的に思考し、行動できるか」という問いに対して、特に 20 世紀前半のドイツ語圏の文学と思想が二つの世界大戦に直面してどのように応答したのかを明らかにし、それによって近現代ドイツ語圏の文学と思想を新たな文脈で検討することを目的とする。

近年、「集団」をめぐる言説と表象の研究が、ドイツ語圏の文学研究や文化研究においても活発に行われているが、本研究課題が設定するような、20 世紀前半の両世界大戦・ホロコーストと群集をめぐる言説というテーマは、その重要性に比してまとまった研究がない状況である。本研究の独自性は、第一次世界大戦から第二次世界大戦、ホロコーストにいたる時期についての文学と思想を、群集をめぐる言説の変遷という観点から論じる点にある。これによって「群集を主体として展開する」（スローターダイク）という近代の（未完の）プロジェクトの経緯と帰結をより明確にすることができると同時に、群集の主体化をめぐる言説を多様な文脈において読解することが可能となる。なお、ドイツ語の Masse には、日本語の「群集」「大衆」「集団」など複数の意味があるが、本研究では必要に応じて使い分け、差異化するとともに、その共通のイメージ性にも注目する。

３．研究の方法

本研究課題は主に二つの方向で近現代ドイツ語圏の文学と思想の読解を進めた。一つは、カネッティの『群集と権力』やアーレントの『全体主義の起源』などの理論的テクストを、群集をめぐる言説の変遷という観点から再検討することである。これらのテクストは戦後に出版されているものの、その直接的、間接的な背景は 20 世紀前半の二つの世界大戦と戦間期に求めること

ができる。これらのテクストを再検討する際には、その背景だけでなく、より現代的な集団の在り方をめぐる議論も踏まえつつ批判的に考察することを心掛けた。

もう一つの読解の方向としては、ドイツ青年運動に関連する理論的テクスト（ヴィネケン）や戦間期の英霊祭祀の研究（モッセ）、ホロコーストの生還者の手記（フランクル）など、従来あまり群集という問題に関連付けられてこなかった資料についての考察である。これにより群集をめぐる言説をより立体的、複層的に把握することが可能になった。

当初はドイツでの資料調査も予定していたが、世界的なコロナウイルス感染症の影響のため断念せざるを得ず、研究期間も 2 年間延長した。しかし 2021 年度からは研究分担者として新たな科研の関連プロジェクト（基盤研究 C21K00439「世紀転換期から第 2 次世界大戦後までのドイツ語圏における群集思考の歴史的展開」）に参加し、国内で研究者との交流を進めることができた。

４．研究成果

コロナ禍による制約はあったものの、当初に計画していた成果は論文あるいは口頭発表の形でほぼ全て達成することができた。

初年度はホロコーストと群集の問題について取り組んだ。フランクルの『夜と霧』についての論文（日本ユダヤ学会『ユダヤ・イスラエル研究』第 32 号）では、「群集の精神病理学」という言葉に着目し、強制収容所という極限的な状況下での群集化された人々の心理と客体化の問題について、特にフランクルのロゴセラピー思想との関連で考察した。また『群集と権力』における「インフレーションと群集」をめぐる問題についての発表（日本独文学会秋季研究発表会）では、ホロコーストの原因をヴァイマル共和国初期のハイパーインフレーションの経験に求めるカネッティの議論の妥当性について、ホロコースト研究史との関連で検討した。

2019 年度はドイツ青年運動における群集という問題に集中し、ドイツ青年運動の代表的な理論家であるグスタフ・ヴィネケンの著作に集中的に取り組んだ。教育改革とも結びついた 20 世紀初頭のドイツ青年運動は、ワンダーフォーゲル運動に代表されるように、大都市における近代的個人主義に抗して、青年たちの自然での集団体験を志向した大衆運動であったと言える。この研究では、主に第一次世界大戦までのドイツ青年運動を理論面で代表する教育家ヴィネケンの論文を取り上げ、「教師」－「生徒」の関係がしばしば「指導者」－「群集」のモデルへとスライドしていることを確認した。ただしヴィネケンによれば、青年たちの集団は受動的であってはならず、指導者を手本にしながら、自律性と主体性を獲得しなければならないという。青年集団における「怠惰な群集本能」の克服を目指すヴィネケンの言説の独自性と一貫性を、ル・ボンの『群集心理』などと比較しながら、群集論の文脈から明らかにした。本研究はまず国際会議「アジア・ゲルマニスト会議」（2019 年 8 月札幌開催）にてドイツ語で発表され、参加者から貴重な意見やアドバイスを受けることができた。その後「アジア・ゲルマニスト会議」の論文集に収録された。

2020 年度はカネッティの『群集と権力』についての考察を軸に、二つの方向で研究を進めた。一つは、1920 年代におけるカネッティ自身の「群集体験」に淵源を持つ『群集と権力』を、現代の新しいメディア環境とそれによって生み出された集団現象との関連で読み直す作業である（縄田雄二編『モノと媒体の人文学――現代ドイツの文化学』（岩波書店）収録）。この作業を通じて、二つの世界大戦を挟んだ 20 世紀前半から現代までの「群集」と「メディア」をめぐる言説の連続性と断絶を改めて問い直すことができた。二つ目の研究として、カネッティの『群集と権力』における「群集と歴史」の章の読解に集中的に取り組んだ。カネッティは 19 世紀後半から第一

次世界大戦、ナチズムの誕生にいたるまでの「ドイツの群集構造」を分析しているが、その際にドイツ国民にとっての「閉じた群集」としての「軍隊」にある種の宗教性を見出している。カネッティにおける集団概念としての「軍隊」と「宗教（教会）」の関係について、フロイトの『集団心理学と自我分析』と比較考察した。

コロナ禍のために延長した 2021 年度および 2022 年度は、アーレント『全体主義の起源』やモッセ『英霊』の議論を検討しつつ、両大戦間期の群集をめぐる議論を引き続き検討した。特にアーレントが強制収容所の分析に際して参照したと思われるオイゲン・コーゴンや H. G. アードラーなどの生還者たちの著作を群集論の文脈において考察することは今後の課題となったが、分担者として参加している科研の関連プロジェクトにて研究は引き継がれる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Shinichi Furuya	４．巻 -
２．論文標題 Das Bild der Masse in der Jugendbewegung - Am Beispiel von Gustav Wyneken	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz. Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo.	６．最初と最後の頁 315-320
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 古矢 晋一	４．巻 32
２．論文標題 フランクル『夜と霧』における「群集の精神病理学」について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	６．最初と最後の頁 30-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 古矢 晋一
２．発表標題 「災害ユートピア」における群集の表象－ドイツ語圏の文学と思想を例に
３．学会等名 立教大学文学部人文研究センター主催 シンポジウム「SDGs×人文学」第3回「文学に探る」（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 古矢 晋一
２．発表標題 宗教としての軍隊？－カネッティ『群集と権力』における「ヴェルサイユのドイツ」について
３．学会等名 科研費国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（B））「日独近代化における〈国民文化〉と宗教性――学際的・国際的共同研究基盤の強化」2020年度第1回ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shinichi Furuya
２．発表標題 Das Bild der Masse in der Jugendbewegung. Am Beispiel von Gustav Wyneken
３．学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 古矢 晋一
２．発表標題 ドイツ語で博士論文を書く：計画、執筆から出版まで―文学・文化研究の場合―
３．学会等名 ドイツ語論文執筆ワークショップ （日本独文学会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 古矢 晋一
２．発表標題 侮蔑と辱め―カネッティ『群集と権力』における「インフレーションと群集」について
３．学会等名 日本独文学会秋季研究発表会（Web発表）
４．発表年 2018年

〔図書〕　計2件

１．著者名 縄田雄二編（古矢分担執筆）	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 286
３．書名 『モノと媒体の人文学―現代ドイツの文化学』（古矢担当「メディアと群集―カネッティ『群集と権力』を読み直す」）	

１．著者名 畠山寛・吉中俊貴・岡本和子編著（古矢分担執筆）	４．発行年 2021年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 257
３．書名 『ドイツ文学の道しるべ―ニーベルンゲンから多和田葉子まで』（古矢担当：『アントン・ライザー』カール・フィリップ・モーリッツ、『毛皮を着たヴィーナス』ザッハー・マゾッホ、『ある神経病者の回想録』ダニエル・パウル・シュレーバー、『群衆と権力』エリアス・カネッティ）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関